

後宮の泡沫姫 不老不死伝説と人魚の運命

湊祥 Sho Minato



アルファポリス文庫

第一章 緋月と蒼月

「真珠と申します。海妃として、陛下の妃となれたことに至上の喜びを感じております。」

主上を前にし、真珠は叩頭して典型的な挨拶を口にした。

「そうか」

真珠の主となる若き皇帝——緋月は、無感動な声でただそれだけ返した。

新たな妃を迎えているというのに、歓迎しているような気配は一切感じられない声音だった。

——そりゃそうか。私たちは仲良くする必要はない。

真珠は人魚の血を体に宿した不老の乙女・姫魚と呼ばれる存在だった。

汝国の領土内でごく稀に、突然変異的に誕生する姫魚の女性は、皇帝に献上されるのが古くからの習わしである。

純粹な人魚ではない姫魚は不老ではあるが不死ではない。

なお、人魚はここ数百年発見された記録がないそうで、すでにこの世界には存在しないのだろうかという認識が国内には根付いている。

姫魚のもっとも大きな身体的特徴と言えば、後天的に瞳の色が虹色に変色することだった。

十六歳を迎えたばかりの真珠は、つい最近瞳の色が変わり、姫魚だと発覚したのだ。そしてしきたり通り汐国の後宮に輿入れした真珠と、即位してまだ一年の緋月との顔合わせが、後宮内の広間にて今執り行われていた。

「面を上げよ」

相変わらず淡々とした声で命じられ、真珠はゆっくりと顔を上げた。

玉座に腰かける緋月は無表情で真珠を見下ろしている。

汐国では珍しい切れ長の緋色の瞳はどこか無機質に光っていて、まったく感情が読み取れない。

緋月は、女性に見紛うほど美しい面立ちをしているが、彼の容姿の美醜など真珠は興味がない。

この男に自分は今晚殺される。

……真珠が己の宿命を受け入れてしまえば。

「顔は覚えた。……私は公務があるので退室する」

やはり感情を込めずにそう言い放つと、緋月はさっと玉座から立ち上がり、瞳と同色の緋色の髪を靡かせながら、広間から立ち去ってしまった。

顔合わせに立ち会っていた護衛や文官たちが、慌てて緋月についていく。

——ふん。私は所詮、あなたが不老になるための道具に過ぎない。そんな女と、必要以上に交流をする必要はないってわけか。

緋月の言動に、ますます真珠は皇帝という存在への憎悪を膨らませた。

姫魚と交わった男性は、人魚の血を体内に宿すこととなり、不老の体を得る。

しかしどういわけか、姫魚は相思相愛の相手以外と同衾すると、体が泡となって消えてしまうのだ。

つまり真珠は、早ければ今夜にでも死ぬ運命なのである。

真珠についての女官が「真珠さま、宮に戻りましょう」と促した。

確かに、主がいらない広間にこのまゝいても仕方がない。

むしろ一刻も早く、肩がこる長裙は脱ぎ捨てたかったし、頭に挿さっている重い金歩揺も取りたかったため、謁見が終わるのは好都合だ。

生まれてこの方、軽業や暗殺術の会得のために軽装しかしてこなかった真珠には、寵姫としての服装は苦痛極まりなかった。

しかし、真珠が「そうですね」と女官に答えようとしたその時だった。

「なんだ？ 緋月はもう去ってしまっただけか。貴重な海妃の輿入れの儀だというのに」

広間に青年の声が響いた。

緋月の声によく似ていたが、彼よりも少々低い上に雄々しく、感情がこもっている。「太上皇さま……！」

「蒼月さま、わざわざお越しいただきありがとうございます」

まだ残っていた衛士や文官がざわつく。

蒼月は緋月とは三十近くも年齢の離れた兄で、一年ほど前に退位したばかりの太上皇である。

汝国では、皇帝は五十歳を迎えると退位するのが習わしであった。

不老不死である人魚の伝説が民にも浸透しているため、若々しさが重要視される国柄であるためだ。

後継者がいないことや、徳望が高く側近や民衆が退位を望まなかったという事情から、五十歳を超えても皇帝を続けた者も、先々帝などを始め過去には存在している。

しかし蒼月の後継に腹違いの弟の緋月が存在した上、宰相など一部を除いて蒼月の退位に反発する者もいなかったため、しきたり通り蒼月は齢五十で退位した。

つまり蒼月は、現在五十一歳のはずである。

しかしどう多く見積もっても、その若々しい外見は二十代後半くらいにしか見えない。

艶やかで真つすぐな黒髪を垂らし、切れ長の瞳に鋭い光を湛えた、大層な美丈夫であった。

ちなみに蒼月も緋月も母親似なのか、父親が同じ兄弟であるにもかかわらず容貌はあまり似ていなかった。

蒼月の不自然な若さの理由を今一度考え、腹の底から憎悪が膨れ上がった。それと何とか張り付けた笑みの奥に隠し、真珠は口を開く。

「太上皇さま。お目にかかれて光栄でございます。このたび海妃として後宮入りした、真珠と申します」

——こいつが蒼月……。瑪瑙姉さんを亡き者にした男。

恭しく蒼月に挨拶をする真珠の胸の中は、憤怒の感情で満ちていた。

蒼月が皇帝だった頃、真珠が姉のように慕っていた瑪瑙が、海妃として後宮入りした。

そして瑪瑙は蒼月に不老の体を与え、非業の死を遂げたのである。

現皇帝の緋月には直接的な恨みはない。しかし太上皇の蒼月は、真珠がこの世でも憎んでいる相手であった。

「そなたが新たな海妃か。……ほう、まだ若いな」

蒼月は目を細めて真珠を見据え、どこか不気味な薄ら笑いを浮かべた。間もなく皇帝に穢されて命を落とす女を前に、嗜虐的な喜びでも覚えているような表情に見えた。

——嫌な男。でも私は死なない。……まだ。死ぬのはあんたを——蒼月を殺してからだ。

長い間、瑪瑙を殺した蒼月を憎んでいた。

しかし相手は太上皇という、平民の真珠にとっては雲の上の存在である。

真珠は夢の中では顔も知らない蒼月を何度も殺めては消えぬ恨みを晴らしてきたが、現実には蒼月に近づくことすら不可能だった。

そう、昨日までは。

瑪瑙と同じ海魚となった真珠は、今日、海妃として後宮入りした。

海妃となればそれまでの身分など関係ない。後宮入りし正式な妃となり、皇帝に接近することができる。

——太上皇である蒼月と会える機会があるのか不安だったけれど。まさか、海妃となった初日に向こうからやってきてくれるとはな。

後宮は皇帝のものであるはずだが、現皇帝・緋月の兄である蒼月は、自由に後宮に

出入りできる立場にあるようだ。

きっと今日のように、蒼月と対面する機会はあるだろう。真珠は声を上げて笑い出したくなったが、必死に堪えた。

真珠はこのままでは、緋月と交わって死ぬ。

同衾に抗しても不敬罪で処刑される。

そして蒼月殺しが成功した暁には、もちろん大罪人として処刑される。

——どうあっても私は死ぬ運命にある。だったら瑪瑙姉さんの敵を取って処刑されるのが、一番満足のいく死に方だ。

そして蒼月を殺すためには、まずは邪魔な緋月も殺めなければならぬだろう。

——緋月が私の宮に渡ってきた時が、殺害の好機だな。

「先日十六歳になりました。太上皇さまにお声がけいただき、望外の喜びを覚えております。以後お見知りおきを」

緋月と蒼月を殺める光景を想像しながらも、真珠は蒼月ににこやかに微笑み、言葉を返したのだった。

真珠は両親の顔を知らない。汐国の端にある街の路上に、まだ乳飲み子の頃に捨てられていたらしい。

そんな真珠を拾ったのは、旅の雑技団だった。彼らには身寄りのない子を見つけては、一座の者として育てるといふ習わしがあったため、真珠も例にならって拾われたのだ。

一座の大人たちは皆優しかった。

血の繋がりなどない者同士だったのが、それが当たり前前の集団だったので誰もそれぞれの出自など気にしない。

昼間はたどり着いた街の者に芸を見せ、夜は皆でひとつの鍋を囲み、談笑し、移動式のテントの中で寄り添って眠った。

真珠も雑技団の一員として幼い頃から芸を仕込まれた。

生まれつき体が柔らかく、運動能力に優れていた真珠に、大人たちは次々に技を教えていった。

宙がえりの仕方、細い綱を渡る方法、そして……暗殺術を。

雑技団はあくまで表の顔だった。その者たちの真の姿は、卓越した技術を持つ暗殺者集団だったのだ。

ただ、彼らは暗殺者としての矜持きょうじを持っていた。

暗殺の対象は民衆に暴利行為を働く権力者や、女をさらっては苛酷きやくこに働かせる遊女の元締めなど、悪人のみだった。

雑技団の顔をした暗殺者たちは、いわば義賊だったのだ。

次々に技を覚えていく優秀な真珠に、一座の大人たちは面白がってたくさん暗殺術を仕込んだ。

しかし、真珠は暗殺者となることを大人たちに強要されたわけではない。

自分の食い扶持ふちを稼ぐために雑技の仕事は求められたが、暗殺の仕事は一度たりとも要求されなかった。

雑技団の中で暗殺者となるのは、自ら望んだ者だけだったのである。

そしてそんな団員たちの中で、真珠にもっとも優しくしてくれたのは十歳年上の瑠瑠るるだった。

芸がうまいかず落ち込む時も、他の子供と喧嘩した時も、いつも寄り添ってくれた。

年は離れていたが、真珠は「瑠瑠姉さん」と呼び彼女を慕った。

しかし七年前のある日のこと。

瑠瑠の瞳が突然虹色に変色した。

なんと、彼女が姫魚であることが発覚したのだ。

姫魚は後宮入りし、皇帝の妃となるのが習わし。

皆が瑠瑠の輝かしい門出を祝福した。

慕っていた姉分がお姫様になるのだと知った真珠は、寂しき半分喜び半分といった心情で「おめでどう」と瑪瑙に告げた。

その時の瑪瑙が困ったように微笑んでいたのを、今でも覚えている。

おめでたいことなのに、なぜそんな微妙な表情をするのだろうか、不思議に思ったことも。

そしてその疑問は、瑪瑙を送別する祝いの席で、酔いつぶれた団長がこぼした言葉によって、解消された。

『……本当は瑪瑙を後宮になんて送り出したくない。だが、姫魚の存在を隠した者は死罪だ。どうしようもない……』

涙ながらに言葉を紡ぐ団長に、真珠は『なぜ送り出したくないの?』と問うた。

すると。

『姫魚は皇帝と一夜を共にすると死んでしまう。皇帝に不老を与えた後、泡になって消えてしまうんだ……』

真珠は耳を疑った。

——どうして? なぜ瑪瑙姉さんは死んでしまうの? そしてなぜ死んでしまうのに、お祝いしなければならぬの?

混乱する真珠の横で「真珠にそんなこと教えないでよ!」と瑪瑙が団長に怒って

た覚えがある。

そう、もうじき死が訪れるというのに、瑪瑙は気丈に振る舞っていた。

祝辞の言葉など贈りたくないのに、贈らざるを得ない団員たちの歯痒そうな顔を見れば、はかなげに微笑んでいた。

そして後宮入りの前日のこと。

真珠は意を決して、瑪瑙にこう尋ねた。

『瑪瑙姉さんは怖くないの? もうすぐ死んじゃうのに……』

死という言葉を口にし、真珠は泣きそうになった。

するとそんな真珠の頭を優しく撫で、瑪瑙はこう答えたのだ。

『ふふ。私を誰だと思っているの? ただじゃ死なないわよ』

瑪瑙は不敵な笑みを浮かべていた。

その微笑みを見て、真珠の心はパツと明るくなった。

——そっか。瑪瑙姉さんは悪い皇帝を暗殺術で殺して、私たちのところに戻ってくるんだ。

瑪瑙は雑技団の中でも優秀な暗殺術の使い手だった。

特に薬物を使用した暗殺では、団長すら及ばないほどの腕を持つと言われていた。

「私、瑪瑙姉さんが帰ってくるのを待ってるからね!」

明るく笑ってそう告げると、瑪瑙はそれには返答せずただ微笑んだ。そして胸元に輝く首飾りを外すと、真珠に差し出したのだ。

『真珠、これをあなたにあげる。私のお気に入りなだけ……。あなたと同じ名前の寶石がついているの。貝の中からとれる石なのよ。私はもうひとつ持っているからお揃いになるわ』

首飾りには、純白に輝く小さな石がついていた。

太陽の光が当たるときにきらきらと艶めく宝石に、真珠は胸を躍らせた。

『瑪瑙姉さん、ありがとうございます！』

満面の笑みを浮かべて礼を述べると、瑪瑙は柔らかに微笑んだのだった。

真珠はその首飾りを肌身離さず身に着け、時々石の煌めきを眺めては瑪瑙の帰りを待った。

しかし、一か月経っても二か月経っても瑪瑙は戻ってこない。

皇帝の暗殺だからきつと難しいのだろうと、子供の真珠は単純にそう考えた。

そして瑪瑙が後宮入りしてから一年後のこと。

なんと、彼女の訃報が伝わってきたのだ。

——なぜ、どうして？ 暗殺術に長けていた瑪瑙姉さんが死ぬなんて。きつと悪い皇帝に騙されたんだ。

そして慰み者にされて、命を奪われたに違いない。

そう考えた真珠は、当時の汐国の皇帝・蒼月に深い憎悪を抱いた。

毎晩のように、夢の中で彼の首を短刀で斬りつけて、返り血を浴びた。

毒薬を入れた茶を飲ませ、苦しみながら悶え死ぬ姿を見下ろした。

気配を消して背後から忍び寄り、縄で首を絞め上げた。

そんな風に、想像の中で何度も顔も知らない蒼月を殺めたが、真珠の気は収まらなかった。

だって今この瞬間も、本当の蒼月は、大きな宮殿の中で酒池肉林を楽しんでいるに違いないから。

女が皇族に近づくには後宮入りするのが手っ取り早い方法だが、平民の自分には縁遠い世界だ。

出自が不明な真珠は、後宮で働く女官にすらなれない。

暗殺を実行しようにも、真珠は蒼月に近寄ることなどできないのだ。

ただならぬ憎しみを蒼月に抱きながらも、その思いを行動に移すことはできずに月日は流れた。

いつの間にか蒼月は退位し、彼の弟である緋月が新たな皇帝となった。

——私は一生、瑪瑙姉さんの敵を取ることはできないのだろうか。

蒼月に対する怨念は一向に薄れなかったが、復讐の実行については悲観的になってきていた。

だが、そんな時だった。

『真珠……！ その瞳！』

『虹色だ！ お前も姫魚だったのか……！』

真珠が十六歳になったばかりの頃、雑技団の者たちに瞳が変色していることを気づかれた。

そう、瑪瑙と同じ虹色——姫魚の証の色に。

団長は「俺の娘がふたりも皇帝に殺められるなんて……！」と嘆き悲しんでいたが、真珠は逆に喜びで胸を膨らませていた。

——海妃として後宮入りすれば、太上皇となった蒼月にも近づけるかもしれない。

そうすれば瑪瑙姉さんの敵が討てる……

太上皇を殺めてしまえば、間違いなく極刑である。

だがどうせ皇帝の緋月と交われれば自分は死ぬのだ。

——どうせ死ぬのなら、邪魔な緋月と、瑪瑙姉さんの命を奪った蒼月を殺してから。復讐を終えてから。

幼少の頃から仕込まれた暗殺術を駆使すれば、衛兵の目をかいくぐって、退位する

まで玉座でふんぞり返っていただけの愚鈍な太上皇を殺めることなど、容易いはず。

こうして真珠は、汐国の皇帝と太上皇という、本来なら天上人にも等しいふたりの暗殺を決意したのだった。

汐国の上級妃のひとりとなった真珠には、専用の宮である海月宮かいげつききゆうと数人の女官が与えられた。

だが女官たちは皆真珠に対してよそよそしい。

ひそひそと「かわいいそうに」「まだお若いのにね」などと、会話しているのも見かけた。

——どうせすぐ死ぬ海妃に、心から仕える気はないってわけか。

緋月との顔合わせを終えて海月宮に戻った後も、女官たちは着替えの世話もしてこない。

「まあ、そりゃそうだよなあ」と真珠はひとり思う。

むしろ近日中の死を約束された妃に、専用の宮と女官があてがわれたこと自体、真珠にとっては驚きだった。

真珠はひとりで衣裳部屋に入り、皇帝のために着用したやたら派手な上に重い衣裳を脱ぎ、結い上げられた宝髻ほうげきをほどく。

そして動きやすいはん臂と長裙にひとりで着替えると、身軽さに爽快感を覚えた。その後、女官たちはさすがに夕食の用意はしてくれたが、給仕の間も必要最低限の会話しかなかった上に、食事が終わると真珠の側から離れて行った。

数日の付き合いに過ぎないのだからぞんざいに扱ってもいいだろうと思っっていることを、彼女らが隠しもしない様子に真珠は苦笑いだ。

——まあでも、女官たちが距離を置いてくれたほうが好都合だ。

こっちはこの国の君主と元君主を殺めようとしているのだから。

女官に放置された真珠は、勝手に寝室に入って寝台の上に横たわった。

女官たちから何も知らせがないことから、今晩は緋月はやってこないらしい。

——主上であろうとも、姫魚を穢さない限り不老は手に入らない。喉から手が出るほど不老を欲しがっているだろうから、すぐにでも緋月はやってくるかと思っただのに。夜伽を受けにやってきた緋月を殺す準備も覚悟もとうにできていたので、出鼻をくじかれたような気分になる。

寝台の天蓋をぼんやりと眺めながら、緋月がやってきた時の暗殺方法について今一度順を追って復習する真珠。

そうこうしているうちに臉が重くなり、うとうとし始めた時だった。

——部屋の外に誰がいる。

気配を感じた真珠は、一瞬で体中の全神経を研ぎ澄ます。

扉の外にいるのは、ふたり組のようだった。

彼らからは殺気を感じられたが、足音や息遣いを潜めてはいない。

刺客からすれば、か弱い妃ひとりを始末するだけの簡単な仕事である。

甘く見られるのも当然と言えよう。

——だけど私はただの妃じゃない。……ご愁傷様。

ふたりの刺客の行く末を哀れに思っていると、勢いよく寝室の扉が開いた。

覆面を被ったふたりの男がなだれ込んできた。

そしてそのうちのひとりが真っ先に寝台にやってきて、膨らんだ布団を刀で斬る。——だが。

「いない……!?!」

手ごたえのなかった一撃に、男が驚きの声を漏らす。

そしてその隙に、男たちが部屋に入る前に天井に張り付いていた真珠は、男の背後に降り立ち、針で首を刺した。

「ぐっ……」

男は低く呻き、その場に倒れ伏す。

真珠が針で刺した箇所は、人間の急所のひとつである。

彼は一瞬で死に至ったはずだ。

「なん……だ……」

扉付近に立っていたもうひとりの男が、慌てたように後ずさる。

あっさり殺せるはずだった妃の無駄のない俊敏な動きに、度肝を抜かれているようだった。

——推測でしかないけれど……。こいつらは緋月に不老になられたら困る勢力の差し金つてところか。だから私が緋月と交わる前に、殺しに来たってわけだろうな。

残ったひとりを拷問して首謀者を割り出そうかとも考えたが、そんなことをやっている場合ではないと思ひ直す。

蒼月と、彼を殺すのに邪魔な緋月の命さえ奪えれば、自分を狙う者が誰なのかなどどうだっていい。

また刺客を差し向けられれば、今のように戻り討ちにすればいいだけだ。

「おい。処理が面倒だから、そいつの死体を持ち帰ってくれないか？ そうすればあんたは見逃してやる」

そう告げると、男はしばらくの間身動きせず黙っていた。

きつと真珠の暗殺を続行するか、おとなしく仲間の死体を持ち帰るか考えているのだろう。

しばしの静寂が寝室に流れた後、男は寝台に歩み寄り、仲間の死体を担いだ。そして窓を開け夜の闇の中へと消えて行った。

侵入してから数秒で仲間が殺されたのだ。

自分では真珠に敵わないと踏んだのだろう。

——賢明な判断だな。

ふたりとも殺めてもよかったが、それこそ死体処理が面倒である。

それに逃がそうが殺そうが、真珠を抹殺したいのならまた暗殺者を差し向けてくるに違いないだろう。

とりあえずカタがついたが、ものの数分の出来事だったし、あまり大きな音は立てていない。

女官たちの寝室は真珠の寝室からは離れているので、恐らく誰にも気づかれていないだろう。

——この件は、誰にも報告しないことにしよう。

緋月の耳に入れば海月宮の警備を強化されてしまう。そうなれば、夜伽を求めてやってきた緋月を殺すのが非常に面倒になる。

暗殺者なんて何人来ても、自分が内密に処理をすればいい。

今は緋月と蒼月を、どう手際よく殺すかが最優先事項なのだから。

「真珠さま、とてもお綺麗ですよ！」

姿見越しに目を合わせた女官が、わざとらしい笑みを浮かべている。

海月宮の衣装部屋にて、女官三人がかりで真珠は着飾られていた。

衣装合わせがやっと終わったかと思えば、不自然なほどに白くなるまで頬に白粉おしろいをはたかれ、「こちらの金糸のもののほうがこの衣装には合っているわ」「いえ、赤い宝石がついたこつちよ」などと談義されながら、髪飾りを次々に付け替えられる。

——皇帝の前に出すのだから、腕によりをかけているってわけかあ……

女官たちの張り切りように、真珠は顔を引きつらせる。

ふたり組の刺客の襲撃をかわして一夜明けた日の午後。今夜、緋月が真珠の元に渡るとの通達があった。

知らせを受けてすぐに真珠は風呂に入れられて全身を磨かれ、少しでも美しく見えるよう、女官たちの着せ替え人形になっているというわけである。

——身を任せているだけだけど、なんだか気疲れする……。後宮の妃も大変なんだなあ。

雑技団にいた頃は、客に見せるために自分で化粧をし、軽業師用の衣装に着替えたものだが、妃用のやたらと重い衣装や金歩揺は着用しているだけで肩こりを伴う疲労を覚えてしまう。

「さあ、これで準備は万全ですわ」

「寝室には香油を焚いておきましたので、もうよい香りになっているかと思えます。そちらで陛下をお待ちください、真珠さま」

数時間かかった衣装合わせと化粧がやっと終わり、女官たちがにこやかに告げる。やはりどこか嘘くさい微笑みである。

真珠がこの後命を落とすことに、彼女たちも何らかの思いがあるのだろうか。

「……ありがとうございます」

一応礼を述べた後、重い長裙を引きずって寝室に入り、寝台に腰かける。

——いよいよだ。やっと……やっと緋月を殺すことができる。

喜びに胸を震わせながら、考えていた暗殺の手順について今一度真珠は復習した。

昨日の刺客と同様、寝室に入ってきた緋月を一撃で仕留める。

寝室の外には皇帝直属の護衛がいるはずだが、声を発する前に殺めてしまえば問題ない。

そして護衛が緋月の死に気づく前に窓から海月宮を抜け、後宮に隣接している太上皇の宮に侵入する。

昼間に後宮内を散策すると告げて歩き回り、位置は調べておいた。

太上皇の宮の内部の構造は分からないし、衛兵と鉢合わせる可能性は高いが、すべ

て殺めて蒼月の寝室を捜せば済むこと。
——物心つく前から曲芸と暗殺術を学んできたんだ。大抵の衛兵ならば倒せる自信がある。

蒼月さえ殺めてしまえば、後はどうなっても構わない。
捕まろうが、拷問されようが、処刑されようが。
だから逃亡の方法まで考えていなかった。

考える必要性がなかったのだ。
たとえこの場から逃げおそれたとしても、皇帝と太上皇を殺した女を、彼らに仕える者たちは地の果てまでも搜索するだろう。
さすがに真珠とて、その追手から逃げ切れる自信はない。

——私の命なんてどうでもいい。どうせどうしたって私は死ぬんだから。
その前に、蒼月と緋月を道連れにできさえすればいいのだ。
そんなことを考えながら待っていると、扉を二回叩く音が聞こえた。

「はい」

「陛下がいらっしゃいました」

扉越しに女官が真珠に告げる。

いよいよだな、と真珠は針を手に持ち、寝室の入り口の壁際に移動した。

——仕掛けるのは緋月が寝室に入ってきて、扉を閉めた瞬間。背後から首をひと突きだ……

とうとう復讐計画を実行する時が来たのだと思うと胸が高鳴ったが、深呼吸をして気持ち落ち着かせる。

暗殺を行う時は、平常心でいなければ失敗する可能性が高くなるのだ。

そして再び扉が開く。緋月が姿を現した。

「海月宮にお越しいただき光栄でございます、陛下」

口角を上げ、緋月に向かって恭しく挨拶をする。

頬に厚くのった化粧のせいで少しだけ笑いづらかった。

「ああ」

短くそう返事をした緋月は、寝室に足を踏み入れながら後ろ手に扉を閉める。廊下に残された護衛の姿が一瞬だけ見えた。

一見して、筋肉だけ無駄に付いた愚鈍な男だと、真珠は護衛の実力を見極める。

あんなのが夜伽の際の警備を司っているとは。

汐国は深刻な人手不足なのだろうか。

——でも、護衛が弱ければ弱いほど私としては都合だ。

きつと静かで速やかな暗殺が成功すれば、あの護衛はしばらくの間異変に気づかな

いだろう。

真珠はほくそ笑む。

そして、緋月が寝台のほうへ一步踏み出した——その瞬間。真珠は素早く緋月の背後に回り、首に針を打ち込もうとした。しかし。

「……………」

なんと、針の先端が首筋に触れるすんでのところで、緋月は腕を出して針を振り払ったのである。

——くそ……………！ 失敗したつ。

予想外のことに狼狽える真珠だったが、もうこうなってしまうえば少し乱暴な手段で殺害するしかない。

真珠は緋月に掴みかかり、再び首に一撃入れようとする。だがそれも緋月に腕を掴まれて、阻止されてしまった。

そして揉み合いになった末に、緋月に両手を掴まれて真珠は動きを封じられてしまった。

——こいつ、素早い……………！ それになんて力だつ。

緋月の身のこなしに吃驚した。

瘦躯^{うすく}だし、どうせ皇帝など玉座に座っているだけだろうと甘く見ていた。

この動きは、日頃から鍛錬を積んでいる者に違いなかった。

緋月は蒼月と同様、文武両道に長けた名君だと庶民の間では噂されていたが、どうせ皇帝を崇めやすくするための出まかせだろうと真珠は思い込んでいた。

しかし、少なくとも「武」の才に恵まれていたことは真実だったようだ。倒されて床に背を押しつけられた真珠を、緋月が見下ろしていた。

相変わらず無表情で、緋月の感情は読み取れない。

「顔合わせの時。君は終始にこやかに微笑んでいたが、一瞬だけ殺気を瞳に浮かべたように見えた。もしや……………と思って警戒していたが、まさか殺そうとしてくるとはな。姫魚の運命を嘆いて私を亡き者にしようとしたか？」

「……………」

淡々と言葉を紡ぐ緋月の腹を蹴飛ばし、真珠は彼の下から逃げた。

——もう後には戻れない。助けを呼ばれる前にもう一度攻撃を仕掛けるしかない……………！

再び針を構え、緋月に向かって振りかぶる。

だが、その時だった。

「陛下！ 大きな音がしましたが、何かございましたか!?」

扉越しから衛兵の声が聞こえてきた。
 揉み合いの際の音が外まで響いていたのか。
 まずい、と真珠は青ざめる。

ここで緋月に自分の凶行を説明されてしまえば、間違いなく騒ぎになり多くの武官が集まる。

そうなたら多勢に無勢で、さすがの真珠も取り押さえられてしまうだろう。

復讐を終えることなく、ただ処刑されるだけになってしまおう——と、最悪の事態を想像した真珠だったが。

「……なんでもない。卓から茶器が落ちただけだ」

緋月が予想外のことを平然と衛兵に告げたので、真珠は虚を衝かれた。

——どういふつもりだ……？

困惑する真珠だったが。

「……いったん落ち着け。私は殺されるつもりはないが、君の今の行動を咎めるつもりもない」

じつと真珠を見つめ、緋月が告げる。

彼の緋色の双眸まなこが美しく輝いていた。

真珠は構えを解き、針を持っていた手を下げた。

すると緋月も警戒心を緩めたのか、ふう、と息をつく。

「私は不老になる気はない。君に興味もない。周りがうるさいから、しきたりに従って君を海妃として迎えたまでだ」

「え……！」

予想外のことを告げられ、真珠は掠れた声を漏らした。

海妃を迎えた皇帝は皆不老となり、海妃は後宮入りして数日以内に命を落としていく……というのが通説だった。

富と権力ですべてを手に入れられる皇帝だが、不老に関しては海妃の存在次第で、いつでも得られるわけではない。

喉から手が出るほど欲しているはずなのだ。

それなのにまさか、不老を望まない皇帝が存在するなんて。

「つまり私は今夜も今後も君の夜伽を受ける気はない。ここから出て行ってもらっても構わない。君は私と交わる前に自殺したと皆には話しておく。……今日はそれを伝えに來ただけだ」

「嘘……」

皇帝に対する思い込みのすべてが覆され、真珠はしばしの間放心してしまう。

——不老になる気はない、だって？　ここから出て行っても構わない？　……私は

この人に殺されないってこと？

逃れられない自分の死を受け入れて、真珠は蒼月への復讐計画を進めていた。しかしここに来て、生き永らえる道を示されてしまい、真珠は混乱していた。だが。

——違う。緋月の言う通りにここから出て行ったとしても、私はずっと蒼月への恨みを抱えたまま生きていくことになる。

もし後宮を出てしまえば、二度と蒼月には近寄れなくなるだろう。

深い憎悪を抱え、復讐できないやるせなさと共に人生を歩むなど、耐えがたい苦痛に違いない。

——やっぱり私は、蒼月の命さえ奪えれば、後はどうなっても構わない。すでに私の決意はそこまで強いものになっている……！

「ここからは出て行きません。……私は蒼月を殺すために来た。邪魔をするならあなたも殺します」

低い声で緋月にそう告げると、再び真珠は針を構えた。

ここで緋月に暗殺計画を打ち明けたのは悪手かもしれない。

だが、いろいろと計画が狂い、真珠はもうやぶれかぶれの気持ちになっていた。すると緋月は、驚いたように目を見開いた。

真珠が彼と出会ってから、初めて表情を変えた瞬間であった。

「蒼月を……なぜ？」

「あいつは……あいつは瑪瑙姉さんを殺した。私の姉さんを……！ 復讐するために私はここに来ましたっ」

息を荒らげながら、真珠は緋月の問いに答える。

「瑪瑙……。蒼月に捧げられた海妃だな」

「そうです。あの男は不老の体を手に入れるために瑪瑙姉さんを慰み者にして殺した……。あいつさえ殺せれば私はどうなってもいい」

気づかぬうちに真珠の目には涙が浮かんでいた。

蒼月への恨みを初めて誰かに口にしたせいだろう。

緋月はしばしの間黙ってそんな真珠を見つめていたが、「……ふっ」と息を漏らした後。

「ふふ……ははははっ」

なんと、腹を抱えて笑い声を上げたのだった。

「……え」

思ってもみない緋月の反応に目をぱちくりさせていると、彼は真珠を見つめてこう告げた。

「……真珠。私と手を組まないか」
「え……!?!」

驚くべき緋月の言葉に、真珠はますます理解が追いつかない。

——手を組む……? それって、私と緋月が蒼月を殺すために協力するってこと……?」

「私も蒼月と確執がある。……奴の死を願うほどのな」

「え……。だって蒼月はあなたのお兄さんでは?」

現皇帝の緋月と、前皇帝で太上皇の蒼月は、年齢は離れているが異母兄弟であるはずだ。

「……兄弟による殺し合いなど、皇族の間では何ら珍しくないことだ」

自嘲気味に笑って緋月が答えた。

言われてみれば確かにそうだ。

汝国の歴史を遡ると、帝位継承問題や立后争いなどに起因する皇族間の殺し合いは何度も起きている。

だが、すでに緋月は皇帝となっているし、蒼月が退位した際も滞りなかったと聞く。緋月も蒼月も子をなしていないので、世継ぎの問題も起こっていない。

緋月が蒼月の死を願う理由が、真珠には想像できなかった。

「海妃としての運命を悲観した、ただのつまらない女だろうと考えていたのに。神のように崇められている蒼月を殺そうなど、見上げた根性だな。まさかこんな面白い女が後宮入りするとは」

緋月は真珠を興味深そうに眺めている。

どうやら、緋月にとって予想外の行動を取ったことで、関心を引いたらしい。

——緋月の言葉をすぐには信じられない。でもこの人、本当に私をどうこうして不老になる気はないみたいだな。

不意打ちの真珠の攻撃を防げる身体能力である緋月ならば、無理やり真珠の貞操を奪えているはずである。

さらに彼は、真珠が襲ってきた件についても衛兵に告げなかった。

——緋月の言っていることは本当かもしれない。それに皇帝が味方に付いてくれれば、私がひとりで動くよりも蒼月を簡単に殺せるはず。……でも。

「……少し考えさせてください」

まだ緋月の真意が分からない今、全面的に信頼して協力関係を結ぶべきではないだろう。

「意外に慎重なのだ。いきなり仕掛けてくるから、もっと単純な女かと思っていた」

小馬鹿にしたようなことを平然と言つてのける緋月に、真珠は苛立ちを覚える。

「……皇帝などという存在を、すぐに信用できるわけがないではないですか」

そうだ。かつて皇帝だった蒼月は瑪瑙をいように利用し、命を奪った。

緋月だって蒼月と同じ皇帝である。

すぐにその言葉を信じることなどできるはずがないのだ。

威勢よく言い返した真珠に、緋月は少しの間目を瞬かせていたが、なぜか口角を上げた。

「……ふっ。それもそうだな」

一体何がそれもそうなのだろう。

自分だって皇帝のくせに。

その返答に戸惑いを覚えるも、緋月はそんな真珠に構わずすたと寢室の出入り

口のほうへと歩んでいき、扉を開けた。

「今夜はもう終いだ。私は自分の部屋に戻る」

扉の前で警備していた衛兵に緋月はそう告げる。

すると衛兵は驚いたような面持ちになった。

「えっ……？　もうですか……？」

「そうだ」

「……？　あれ、海妃が生きております！」

「だからなんだというのだ？」

衛兵とそんな会話を繰り返しながら、緋月は寢室の扉を閉めた。

ひとり寢室に取り残された真珠は、深く長い嘆息を漏らした。

とりあえず最悪の結果にならなかつたことには安堵しているが、すべてが予想外過ぎて、まだ気持ち追いついていない。

予定では、とっくに緋月を殺害し、今頃蒼月のいる太上皇用の宮に忍び込んでいるはずだったのに。

もしくは、すべてが失敗して緋月に貞操を奪われた末に、命を落としているはずなのに。

「海妃が生きております」と驚いていた衛兵だって、緋月が不老を手に入れて海妃が泡となっている光景を想像していたのだろう。

——私と手を組みたい、だって？　一体なぜ緋月は蒼月の死を願っているのだろう……？

緋月の真意が分からず、静寂に満ちた寢室で真珠はひとり考え込むのだった。

第二章 幼馴染の暗殺者

現皇帝である緋月から、「手を組まないか」と提案された翌日。

本当に緋月は蒼月を殺したのだろうか、だとしたらなぜなのだろうかなどと、海月宮の一室で真珠が思考を巡らせていると。

「真珠さま。太上皇さまから、明日正式な婚儀の挨拶の場を設けると知らせがありましたわ」

女官にそう告げられ、真珠は困惑する。

「蒼月さま……太上皇さまから……?」

「はい。この前の顔合わせの時は、ゆっくり話せなかったからだとか……。陛下と共に太上皇さまの宮に向くようにとのことです」

確かに、あの時は緋月がすぐに立ち去ってしまったこともあり、バタバタしていた。蒼月とは二言三言会話をしただけだ。

——だけど、蒼月が弟の妃と話すことなんてあるのだろうか。意図は分からないが、命令されたからには出向くしかない。

蒼月を暗殺する好機……とまでは考えられなかった。

緋月に目的を知られている上に、協力を持ち掛けられている以上、単独での行動は避けたほうがいいだろう。

その晩、緋月は真珠の元には来なかった。

昨日の話の意図や、明日の挨拶の場について詳しく聞きたかったのに。

まあでも、緋月には他にも妃がいるし、執務だってある。

手を組もうとしている相手とはいえ、毎日真珠のところばかり訪れるわけにはいかないだろう。

そして次の日。

またもや女官に丁寧な支度をされた後、指定された時間まで海月宮でぼんやりしていたところ、緋月が迎えに来た。

緋月はやはり護衛を引きつけていたが、海月宮の一室に入ると、「誰かが来ないか見張っておくように」と護衛を扉の外に置いた。

部屋には緋月と真珠のふたりきりとなった。

これでようやく内密な話ができる。

緋月は座卓の傍らに置かれた坐具に腰かけた。真珠も彼と向かい合わせになるように座る。

すると。

「再び君の暗殺対象である蒼月と顔を合わせるわけだが。まさか武官や女官もいる挨拶の場で、仕掛けるなんてことはないよな？」

念を押すように緋月が尋ねてきたので、真珠は呆れた顔をする。
「あのですね……。さすがにそんなことは考えていません。陛下は私をなんだと思っ
ていらっしやるのですか？」

人の目が多い行事の最中に、そんな凶行に及ぶわけがない。
失敗する可能性のほうが高いのだから。

——まあ、もし今日確実に死ぬ運命だなんてことになっていたら、やぶれかぶれで蒼月に切りかかるかもしれないけれど。

すると緋月は「ふっ」と不敵な笑みを浮かべる。

真珠の言動を、なんだか面白がっているような気配が感じられた。

「そうか。先日は寝室に私が入った瞬間に針で刺そうとしてきたから、もしやと思っ
てな。一応忠告しに来た」

「……そうですか」

真珠のことを堪え性のない狂犬だとも思っているらしい。

まあ、高貴な皇帝から見れば、いきなり攻撃を仕掛けてくる平民出身の女など、下

賤な者に違いないか。

「それを聞いて安心した。だが、蒼月に殺気を向けることも抑えるように。……あの男は勘が鋭い。何がきっかけで、君の復讐心に気づくか分からない」

今までよりも、神妙な面持ちで緋月が言う。

皇帝時代、蒼月は名君だと市井では謳ほめわれていた。

弟の緋月が「勘が鋭い」と述べるからには、きっと思慮深い男なのだろう。

——暗殺を遂行するためには、慎重に行動しなければいけないってわけか。

「承知いたしました」

真珠は深く頷いた。

緋月と共に赴いた太上皇の宮の大広間は、すでに宴の準備が整っていた。

部屋の最奥には玉座が二脚置かれている。

ひとつにはすでに太上皇である蒼月が腰かけていた。

空いているもうひとつは皇帝用だろう。

汐国でも他国同様、皇帝は絶対君主であり国政を行う。

しかし退位した太上皇は神に近い存在と言われ、皇帝よりも高い地位であるときざれている。

よって太上皇の命に皇帝は逆らえないのだった。大広間に入るなり、緋月と共に蒼月の前まで歩み寄った真珠は叩頭した。緋月は立ったまま、身動きを取らなかったが。

「このたびは、改めてご挨拶の機会をいただきましてありがとうございます。太上皇さま」

「そんなにかしこまらずともよい。面を上げよ」

恭しく挨拶をする真珠に、蒼月は軽い口調で告げる。

命じられた通り顔を上げると、蒼月は不敵な笑みを浮かべながら真珠を見下ろしていた。

値踏みされているような、不快な視線だった。

「……ありがたき幸せに存じます」

不愉快な気持ちや憎しみを表に出さぬよう、顔に笑みを張り付ける。苦痛でたまらない。

姫魚だの海妃だのはさておき、かしこまった振る舞いを求められる後宮という場合は苦手だ。

——やはり私は、何事にもとらわれずに日々軽業を磨くほうが性に合っているな。もう二度と戻れない雑技団での日々を、思わず追懐する。

その後何を言ったらいいか分からず黙ってしまふ真珠だったが、蒼月も笑みを浮かべたまま何も言葉が発さない。

また、緋月も無言を貫き、無表情で蒼月を眺めていた。

真珠にとっては慣れない場なのだから、少しは場を取り持つようなことをしてほしいものである。

「真珠さまのお席はこちらです」

見かねた女官が真珠に声をかけてくれた。促された席のほうへ歩むと、近くにはふたりの女がいた。

ふたりはまるで真珠を出迎えるように坐具から立ち上がった。

「初めまして、真珠さま。私は紅暁華と申します。後宮では夫人の立場にあります。

お見知りおきを」

「藍林杏でございます。皆からは藍夫人と呼ばれております」

紅夫人はにこやかに微笑みかけてくれたが、藍夫人は感情の込もっていない顔だった。

「このたび、海妃となった真珠と申します。夫人のおふたりにお会いできて光栄の極みです」

二夫人に挨拶を返しながらも、真珠は彼女らについて現在知っている情報を脳裏に

蘇らせる。

——確か、今後宮にいる上級妃は私を除くとこの二夫人だけだったな。

元々、すぐに緋月と蒼月の暗殺を遂行して死ぬ予定だったため、あまり二夫人の情報仕入れていない。

だが、今日ここに来る途中に緋月がこんな話をしていた。

『先ほど知ったのだが、今日は二夫人も呼ばれているそうだ。彼女らについては、今後のことを考えると君も知っておく必要がある。今は時間がないので話せないが、後日彼女らと私の関係について詳しく説明しよう』

なぜかは分からないが、蒼月の暗殺を実行するためには、この二夫人の情報を頭に入れておかなければならないらしい。

——ふたりがどんな人なのか、今日はよく見ておこう。

ふたりの外見は対照的だった。

紅夫人は赤を基調とした派手な配色の上襦じゆせと裳もを着用し、目がちかちかするほどの多くの装飾品を付けている。

目元は赤く縁どられ、唇も艶やかな紅が塗られていた。

一方で藍夫人は、紺色の裙ゆばに白の上襦を着用し、装飾品は耳飾りのみだ。化粧も白粉を軽くはたいただけのように見えた。

正反対な二夫人だが、年齢はふたりとも二十歳を少し過ぎた頃といったところだろう。

そんな風に、さりげなく二夫人を観察していたら、出来立ての料理が卓に次々と運ばれてきた。

「……今日は緋月と海妃の挨拶の場ということになってはいるが、こうして皆で集う機会が最近なかったもので、二夫人も召集したのだ。皆、かしこまらずに楽しく過ごしてくれ」

蒼月が皆にそう告げると、宴が始まった。

「この包子パオズには私の出身地の羊肉が使われていますの。真珠さまもぜひ召し上がってください」

「……はい」

紅夫人に促されて、眼前にあった包子を口に入れる真珠だったが。

——後宮の料理って、私が今まで食べていた食事よりも断然贅沢な材料が使われている、おいしいのだが……。どうも味が濃くて胃が疲れてしまう。

素朴な味で育った真珠にはどれも濃厚すぎるのだ。真珠は作り笑いを浮かべて「とてもおいしいです」と紅夫人に告げる。

「その羊肉は柔らかく極上だから。そして隣の粥には藍夫人の故郷で収穫された薬

草がふんだんに入っている。そちらもコクがあつて美味だ」
 蒼月がそんな説明をするので、粥の椀を真珠は手に取った。口に含むと、菓草の苦みやら甘みやらが口内に広がった。

複雑な味で、正直おいしいのかまずいのか分からない。

——野菜と鶏肉を塩で炒めただけのいつものご飯が食べたい……

つい真珠は、古巢の味を懐かしんでしまった。

そんなやり取りをしている間、いつの間にか蒼月の隣に腰を下ろした緋月は、無言で箸を進めていた。

藍夫人も誰とも喋らず粥をすすっている。

緋月の人柄は分かっていたが、藍夫人も誰かと積極的に交流するタイプではないようだ。

「それにしても、真珠さまは大変かわいらしいお方ですわね。おいくつですか？」

茶で口直しをしていたら、紅夫人に尋ねられた。

「先日十六になりました」

正直に答えると、紅夫人は目をぼちくりさせた。

「まあ、お若い！ だからお肌が瑞々しいのね、羨ましいわ」

「いえ……」

褒められ慣れていない真珠は口ごもってしまう。

紅夫人の言葉を否定するのも失礼な気がして、この先になんて言葉が続けたらいいか分からなかった。

救いを求めて緋月に視線を送るも、彼はこちらの会話など聞いていないのか、口を手巾で拭いていた。

手を組みたいなら素知らぬ顔をするんじゃない……と恨みがましい気持ちになる。すると。

「何を言ってるんだ紅夫人。今日の君は、いつも増して大層美しいではないか」

盃を片手に蒼月が会話に入ってきた。

紅夫人は頬を赤らめて心底嬉しそうに面持ちになる。

「蒼月さま……！ ありがとうございます。これも蒼月さまが先日くださった化粧品

と髪飾りのおかげですわっ」

「なに、弟の妃には常に美しくいてほしいものだからな」

興奮しているのか早口で言う紅夫人に、蒼月は満足げに微笑んでいた。

「今度私の宮にてお礼をさせていただきますませ。蒼月さまの好物をたくさん用意させていただきますわ！」

「ほう、それは楽しみだな」

ふたりは会話を弾ませる。その後も、しばらくの間頬を上気させた紅夫人と、鷹揚に微笑む蒼月はふたりで話をしていた。

その間、紅夫人は緋月に目も向けなかった。これではまるで、蒼月の妃のようである。彼女は緋月の上級妃であるはずなのに。

——緋月と紅夫人はあまりいい関係を築けていないのか？

そう考えた後、もうひとりの夫人——藍夫人のほうをちらりと盗み見る。

彼女は相変わらず言葉を発さずに、出された料理を黙々と食べていた。

紅夫人と蒼月との会話なんて聞いていなそうである。

緋月とも席が離れているためか、一言も口を利いていない。

——紅夫人も藍夫人も癖があるな……

今度緋月が海月宮にやってきた時に、ふたりについては詳しく聞いておかねばならない。

主に蒼月と紅夫人が会話を弾ませる中、時々真珠に出身地や後宮についての感想など、当たり障りのない質問が飛んできた。

笑みを顔に張り付け、真珠は短い言葉で答えた。

藍夫人は話題を振られて相槌を打つことはあったが、緋月は終始無言を貫き通していた。時々、蒼月を睨んですらいる。

——私には、『蒼月に殺気を向けることも抑えるように』って言っていたくせに。

緋月がここまで蒼月への嫌悪を表に出していると、後宮中の者がふたりの不仲を知っていきそうである。

などと、真珠が緋月と蒼月の関係について考えていると。

「……ところで。緋月と新しい海妃はまだ交わっていないのだな」

蒼月がそう言った瞬間、緋月がこれまでよりも眼光の鋭い瞳で彼を睨んだ。

これまで蒼月に媚びるように微笑んでいた紅夫人は、表情を強張らせる。

藍夫人は素知らぬ顔で水菓子を咀嚼しているが。

——私が生きているということとは、つまりそういうことだものな。

そう納得するも、どんな意図をもって蒼月がそんな言葉を口にしたのだろうと、真珠も緊張した。

緋月が何も答えないでいると、蒼月は「ふっ」と鼻で笑った後、口を開いた。

「何をやっているんだ緋月。お前もさっさと不老になったらいいのに。いつまでも若い体は素晴らしいぞ」

悦に入っているような蒼月の面持ちに、真珠は気味の悪さを覚える。

——あなたのその不老の体は、瑪瑙姉さんの死によってもたらされたものだというのに。

間違いないく、蒼月は自身の利益のためなら女ひとりの命など取るに足らないという思考の持ち主だ。

蒼月の立場上それは当然のことかもしれないが、瑪瑙を誰よりも慕っていた真珠は、彼の冷血さに改めて憎悪を覚える。

それでもまだ黙っている緋月に、蒼月は呆れたような顔でこう続けた。

「もしや、その海妃の命を心配しているのか？ ……緋月、お前は皇帝だぞ。捧げられた女のひとりやふたりの命を気にかけてどうするというのだ」

——海妃本人の私を前に、随分な口ぶりだこと。

冷酷極まりないこの男に大切な瑪瑙が穢され、命を奪われたことに、真珠はやるせなさとし憤りを覚えることしかできない。

すると緋月は「ふっ」と鼻で小さく笑った後、ようやく口を開いた。

「私は自身の不老のために海妃を犠牲にする気は毛頭ない。野蛮な兄上と一緒にしないでくれるか」

皮肉たっぷりな緋月が言うも、蒼月はニヤついたらままである。

お互いに相手を揶揄するような物言いに、やはりふたりが兄弟であることを真珠は

実感した。

「ははっ、なかなか言うな。では父上のように、お前の母であつた海妃を愛して不老を手に入れるか？ 私の母であつた正皇后をおざなりにするほどに」

蒼月の言葉に、真珠は虚を衝かれる。

——つまり緋月の母親って海妃だったというわけか？ そして緋月の父であつた先々代の皇帝とその海妃は愛し合つていた……？

海妃である海妃は、相思相愛の男性と結ばれば命を落とさない。

つまり緋月の母親は、先々代の皇帝と心から愛し合い、彼に不老を与えながらも絶命せず、緋月を宿したということらしい。

衝撃の事実我真珠は驚愕したが、一方で緋月は蒼月に鋭い眼光をぶつけながら、冷淡にこう告げる。

「そもそも私は不老などという生物の理に反することには興味がないので。想いを抱いていない女性と同衾するつもりもない」

「世継ぎを女に産ませるのが大事な一国の主として、その発言は問題ではないか？ 多くの女に夜伽をさせるのが皇帝の務めだ。それに一夜を共にして初めて男女の愛が芽生えることだつてあるのだぞ」

「はっ、戯言を。兄上は子をひとりもなしてはいないではないか。不能皇帝だと揶揄

されていたことをお忘れか？」

諭すように言う蒼月に向かって、緋月は小馬鹿にしたような声で反論する。

蒼月にとってなかなか痛いところをつかれたように真珠は思ったが、彼は不敵な笑みを浮かべたままだ。

「ははっ、耳が痛い。しかし、だからこそ同じ父の血を引くお前に、子をなしてほしいのだがなあ」

「……退位し、余生を送ることしかない兄上には関係ないだろう。それにしても、すっかり出しゃばりになったな。やはり外見は若くても中身は気の使えない老いぼれというわけか」

緋月のさすがの暴言に、宰相や給仕の者たちが青ざめているのが見えた。

蒼月は『不老は素晴らしい』としきりに言っていたのだ。

それにもかかわらず、精神的な老いを指摘されたら憤ってもおかしくないように思う。

しかし。

「緋月、お前も繊細そうに見えてどんどん凶太くなっていく。皇帝として、それくらいの精神力はあったほうがいい」

蒼月は笑みを崩さず、冷静にそう返す。

——本当に何を考えているか分からない男だ。

掴みどころのない蒼月の様子に真珠が気味の悪さを覚えていると、緋月は手巾で口を拭いてから素知らぬ顔をする。

そして。

「そろそろくだらない小言は終わりにしてもらえないか。心底不快だ。年寄りと話すのは疲れる」

そう言い放つと緋月は立ち上がり、なんとその場から立ち去ってしまった。

置いていかれた真珠は慌てるも。

「え、えーと。今日は私と緋月の挨拶の場なんだから……。あいつがいなくなっただから、私もこの場から消えていいかな？」

そう解釈して、真珠も坐具から立ち上がる。そして蒼月に向かって深々と頭を下げてから、緋月の後を追った。

すでに太上皇の宮の外に出て、つかつかと歩く緋月に追いつくと。

「……すまない。まさか海妃である君がいるというのに、蒼月があんな暴言を吐くなんてさすがに想定していなかったのだ。今日は蒼月とは無駄に争わず、何を言われても『はいはい』と受け流すつもりだったのだがな」

大変申し訳なさそうに緋月が謝罪してきた。

立ち読みサンプル はここまで